

7 <sup>しもつみち</sup> 下ツ道

## [史跡]

[所在地] 奈良県大和郡山市八条町 372 番 1 外 1 筆等

[所有者] 国 大和郡山市 天理市

[時代] 飛鳥～平安時代

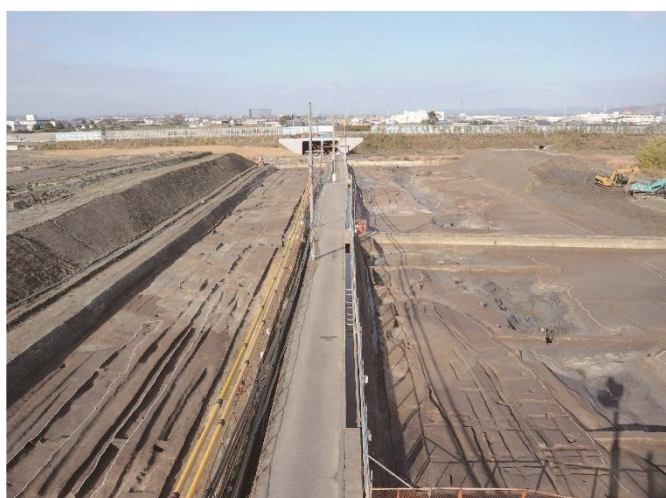
[概要] 下ツ道は、奈良盆地を南北に縦貫する三つの古代道路のうち、西側に位置する道路である。現在の奈良市佐紀町から橿原市見瀬町まで、約 25 km分が直線道となっている。

下ツ道の敷設時期には諸説あるが、『日本書紀』の壬申の乱関連の記事中に見えることから、飛鳥時代（7世紀）後半にはその存在が確認できる。下ツ道は、藤原京域では西四坊大路、平城京域では大きく拡幅され朱雀大路につながっており、両古代都城の造営計画にも密接に関係する道路である。その後、奈良盆地の<sup>じょうりちわり</sup>条里地割の基準にもなり、近世には一部が<sup>なかかいどう</sup>中街道として利用された。下ツ道の痕跡は、現在も道路や土地区画として遺存地割として確認することができるなど、現在も生きる遺跡といえる。

平成 14（2002）年度から開始された「郡山下ツ道ジャンクション」の建設に伴う一連の発掘調査で、下ツ道の東西両側溝が良好な状態で検出された。これまで、下ツ道に関わる遺構は奈良市や橿原市域などで検出されていたが、部分的な検出にとどまっていた。本例のように、160m以上にわたって両側溝が検出された事例はほかにない。

本例での下ツ道の幅は、東西両側溝の<sup>みぞしんしんかん</sup>溝心々間距離で 23.9mである。東側溝の幅は 6～12m、深さは 1.4～2 mで、西側溝の幅は 1.1m、深さ 0.5mである。東側溝は、土層の状況と出土遺物により、奈良時代（8世紀中頃）から埋没が進行し、平安時代（9世紀後半）には概ね埋没、その後は耕作地となった状況が確認されている。また、東側溝からは、橋脚に伴う木杭のほか、<sup>じんめんぼくしよ</sup>人面墨書土器や<sup>どば</sup>土馬、<sup>えま</sup>絵馬、<sup>ひとがた</sup>人形、<sup>いぐし</sup>齋串といった祭祀関連遺物が出土しており、下ツ道の利用状況もうかがえる。

このように、本例は、古代の基幹道路といえる下ツ道の直線性を実際の遺構として確認できる貴重な資料であるとともに、下ツ道の道路としての利用状況及び、その後の土地利用実態について、考古学的にその変遷を捉えることができる重要な資料であると位置づけることができる。



条里界を踏襲する市道と下ツ道両側溝（南から）